



土地の生産性を高め 十勝農業を活性化

秋 本 正 博 准教授

学生たちと落花生の収穫（左端が秋本准教授、左から2番目が十勝
グランナッツ合同会社の田中一郎代表）

主な専門は、作物の栽培方法を改善して収量を上げる栽培学と、新たな作物を導入して土地の生産性を高めていく遺伝資源学です。生産現場の課題は一つの学問では解決できません。考え方を合わせてトータルで十勝農業の活性化させていくのが仕事です。

大学敷地内には私の研究室だけで5畝程度の農地があります。そこに毎年、学生たちと10何品目も違う作物を植えて栽培する研究をしています。協力してくれる農家さんも地域にたくさんいますので研究には恵まれた環境です。学問の先に目指すのは、農業や農作物を中心とした地域内のバリューチェーン作りです。十勝農業は日本有数の規模で品質も優れています。しかし、産業として見ると意外と“欠点”もあります。

その一つが「食品加工率」です。「付加価値率」とも呼ばれます。その土地で作られたものが、域外にいくらで売り出されるか。試算では、道内全体や九州では1.8倍の数字がありますが、十勝は1.1倍ほどです。良い農作物をたくさん作ることは十勝の誇りですが、原材料のままで付加価値を高めずに売っているとも言えます。

ではどんな作物なら地域内で一次産業と二次産業が結び付いたバリューチェーンを築けるのか——。白羽の矢を立てた一つが落花生でした。

国産の8割を占める千葉県は生産者が高齢化しており、他地域で定着できれば将来はブランド化できます。菓子原料など加工適性にも優れています。肝心なのは十勝で育つのかどうかですが、私の研究ではこの5、6年で千葉に引けを取らないくらい収穫できると確認できました。十勝に適した品種を見つけるのと、新品種作りを同時進行でやっています。農家さんが作った落花生を全て買い取り、管内の加工業者に売る合同会社もできています。

バリューチェーンの仕組みが大事なのは他の作物も同じです。麦や大豆、インゲンマメなどでも、栽培方法の改善を十勝農業への貢献として行っています。

秋本正博（あきもと・まさひろ）

1970年群馬県前橋市出身。北大農学部卒、同大学院農学研究科博士後期課程修了。99年から帯広畜産大学助手、2007年から現職。19年に設立された合同会社十勝グランナッツにも参画している。